

書評 三浦慎悟著『動物と人間 関係史の生物学』

*中井淳史¹

Book review: Shingo Miura, "Animals and Humans: Biology in the History of Relations"

*Atsushi Nakai¹

¹ Graduate School of Regional Resource Management, University of Hyogo / Hyogo Park of Oriental White Stork
128, Shounji, Toyooka, Hyogo Pref. 668-0814, Japan

*E-mail: anakai@rrm.u-hyogo.ac.jp

はじめに

おおむねこの20年間で、日本の歴史学研究でも「環境」というキーワードが注目されるようになってきた。環境やそれと密接に関わる生業の問題については、すでに詳細な回顧がなされている（飯沼 2004；春田 2018）。非常に粗雑な整理が許されるならば、その研究にはいくつかの潮流がみとめられる。ひとつは各地でおこなわれた荘園村落調査を嚆矢として、人間の開発を歴史地理学や文献史学、考古学などからあとづけ、地域にのこる景観を手がかりに人間と環境のありようを叙述するものである。これはとくに特定の地域を対象とし、そこにのこる歴史資料の博捜にもとづいた研究が多い（水野 2011）。もうひとつは、人間が自然の資源を獲得する営み、すなわち生業の実態や変遷をみるもので、これも文献史学や民俗学、考古学などでさまざまな研究がなされてきた。さらに近年は、地震災害の実相を解明する研究（矢田 2009, 2018）や、気候変動と人間活動の関係を探る研究など対象はますます多様化している。日本考古学では、遺跡出土の動物遺存体の分析から、当時の人びとの食性や環境復元をはかる研究もめざましい（松井 2008）。

これらのいずれにも共通するのは、人間を主語とする姿勢である。対象や方法の違いはあれども、ひとしく一致するのは人間が自然をどう利用したのか、という視座

だ。これはいまさら取り立てていうまでもないことで、歴史学とは人間がつくりだす社会の時間的変遷を解明する学問として、その自己像を保ってきたからである。

ここに紹介を試みるのは、三浦慎悟氏の著書『動物と人間 関係史の生物学』（2018年12月 東京大学出版会刊行、A4判。以下本書）である。著者は動物の観点からの「関係史」を標榜する。題名をみてもそれは一目瞭然だ。人間を主語とするのが自明である歴史学からすれば、まさに正反対のアプローチにほかならないが、著者の提起はいかなる意義を持ち得るであろうか。

評者は日本歴史考古学を専攻する人文科学畑の研究者で、生態学はおろか生物学の基礎的な教育や訓練すら受けていない門外漢である。にもかかわらず書評の筆をとったのは、著者が提起する「歴史学と生物学の学際的な議論」（p. 791）に対し、コウノトリの野生復帰に携わる機関に所属する考古学研究者（このような立場は、少なくとも日本では一般的ではないはずだ）として何らかの応答を試みることに、いくばくかの意味があるものと考えたからである。本稿ではまず本書の内容を概観したうえで、幅広い地域や分野への目配りのもと多岐にわたる著者の議論に対し、視野の矮小化という批判は覚悟のうえで、評者自身の問題関心に関わる点から若干の論評を試みたい。

本書の構成

本書の目次は以下の通り。各章は50～60ページ前後から、80ページを超えるものもあり、全体で821ページを数える。また、各章の参考文献はいずれも200件を優に超え、その参照先は生物科学全般にとどまらず、農学や人類学、考古学、歴史学、政治学、経済学、ひいては古典文学に至るまで非常に幅広い。この博捜ぶりは、論評を抜きにしてただ驚嘆させられる。

はじめに

凡例

序章 ヨーロッパ文化のなかの自然

¹ 兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科／兵庫県立コウノトリの郷公園
668-0814 兵庫県豊岡市祥雲寺128
E-mail: anakai@rrm.u-hyogo.ac.jp

0.1 森林の国ヨーロッパ／0.2 人工化された自然／0.3 ヨーロッパの農業と牧畜

第1章 ^{メガファウナ} 巨大動物相の鎮魂歌 ^{レクイエム}

1.1 先史時代の人類と野生動物／1.2 旧石器時代における人類の狩猟、狩られる側の論理／1.3 最初の家畜——イヌ

第2章 西アジアでの創造

2.1 ^{フエートイル・クレスセント} 肥沃の三日月弧／2.2 動物の家畜化／2.3 家畜化とミルク利用／2.4 ネコの家畜化？／2.5 家畜化の利益とコスト／2.6 現代の家畜／2.7 ミツバチは“ドメスティケート”されたか？

第3章 農畜融合文化の波紋

3.1 ヨーロッパへの道程／3.2 ヨーロッパ人とは何者か／3.3 ヨーロッパの新石器時代／3.4 遊牧社会の成立とウマの家畜化／3.5 乾燥草原地帯での動物の家畜化／3.6 新石器時代から青銅器時代へ

第4章 ヨーロッパ古代社会の動物と人間

4.1 ケルト社会の成立／4.2 ヨーロッパの自然観の源流／4.3 農畜融合文化が環境に与えた影響／4.4 古代ギリシャとローマ帝国における動物と人間

第5章 中世ヨーロッパの動物と人間

5.1 中世前期の農業と家畜／5.2 中世における野生動物と森林の管理／5.3 キリスト教と動物／5.4 オオカミへの迫害と根拠

第6章 近世への胎動

6.1 ヨーロッパの辺境／6.2 衣料としての動物／6.3 古代の服装と動物との関係／6.4 中世の服装と毛皮交易

第7章 ヒツジとスパイス、そしてクジラ

7.1 近代を切り拓いたヒツジ／7.2 奢侈禁止条例／7.3 スパイスの欲望——大航海時代／7.4 海洋生態系における生物資源の争奪と乱獲／7.5 バスク人の捕鯨／7.6 乱獲を支えた自然観

第8章 1つに結ばれる世界

8.1 “モンゴロイド”の旅／8.2 中南米の文明と家畜／8.3 北米大陸への植民と開拓／8.4 ロシアのシベリア開拓と毛皮獣

第9章 近代ヨーロッパでの動物の再発見

9.1 イギリスにおける動物（博物学）ブーム／9.2 大陸における博物学の煌き／9.3 イギリスにおける博物学の発展と成熟

第10章 北米での野生動物の激動と保全

10.1 北米大陸での開拓と「発展」／10.2 アメリカにおける自然保護の覚醒／10.3 アメリカにおける野生動物保全のうねり

第11章 動物保護の異相

11.1 野生の王国—アフリカ／11.2 ナチス・ドイツと動物愛護、自然保護

第12章 保全・管理と環境倫理の架橋

12.1 日本の生物資源管理／12.2 環境倫理学の始動
終章 生物多様性と持続可能な社会

13.1 生物多様性とは何か／13.2 生物多様性と生態系保全への道程／13.3 人間と生物多様性を守る価値観と経済学

おわりに

事項索引／生物名索引／人名索引

本書の叙述の基盤をなす時空間を著者は以下のように規定する。いわく、時間には生物学的な時間である「進化」と、人間に働きかけられ、関係づけられた「歴史」の二側面があり、空間は「動物の分布であり、多様な生息環境に特徴づけられた生息地」であると (p. ii)。動物と人間に接点生まれ、さまざまな関係が取り結ばれたありようを、著者は「双方向性の相互作用系」(p. iii) と表現するが、それを成立・機能せしめた重要な要素として「動物の独自の形態や生理、生態や行動、生活史、遺伝、生態系での位置」(p. vii) を重視し、これらを人類史に適切に埋め込んで叙述を再構築する必要性を説く。そのための舞台装置が、進化や動物の分布、生息地といった時空間である。

加えて、著者はもうひとつの舞台を用意する。「西欧」だ。その理由として、歴史資料や研究成果が多数蓄積されている点はもちろん、先史時代から近現代に至る長い時間のなかで、人間と動物の関係を継続的に追える地域であること、また西欧文明が人類史全体に果たした波及性と影響力が非常に大きいことをあげる。アメリカの歴史家、リン・ホワイトを引き合いに出しながら、「西欧キリスト教価値観」を基盤とする西欧諸国が、全世界の自然環境改変におよぼした影響力を重視し、ヨーロッパこそが「人間と動物とを交差させ続けた震源であり、原点」(pp. viii-ix) とする見方が披瀝される。この「西欧」への意識は、本書の随所で言及されることをみても本書を貫く重要な問題意識であることは明白だ。詳細をみてゆくまえに、まずはこの点を確認しておく必要があるだろう。

各章の概要

序章ではヨーロッパの自然環境や文化が概観される。

森の国たるヨーロッパ文化の特徴として人工化空間（都市）に自然を持ち込む志向性を指摘し、新石器時代以来の農業と牧畜が相互に関連しながら複合的に発展した生業形態、すなわち農畜複合文化から発展したヨーロッパの文化では、森の自然美・都市の人工美・農牧の田園美がヨーロッパ人の精神や自然観の基盤となったと説明する。

第1章では、ヨーロッパの農畜複合文化成立に至る過程が追跡される。その出発点は第四紀最終氷期である。この時期を境に巨大動物相（メガファウナ）が減少・絶滅した事実を手がかりに人類と動物、自然の関係を検証する。俎上にあげられるのは、巨大動物の減少・絶滅を人類の狩猟の結果とするオーバーキル仮説だ。著者は、この仮説が人間と動物を対立的存在とみなすことに出発点をおくと批判し、遺跡から出土した動物遺存体の研究成果や、バイソンの角を手にするローセルのヴィーナス像（25000年前ごろ）のような旧石器時代の祭祀遺物をもとに、人間とメガファウナは「傍観し合う隣人」（p. 27）であったと述べ、人類犯人説を退ける。そして、メガファウナの食性分析から、その絶滅はC₃/C₄植物の変動という草原環境の変化や入れ替わりの結果と推論する。つぎに議論は絶滅後の人類史へと移り、後期旧石器時代における狩猟やその道具の検討から、採集捕獲から採集腐肉あさり、狩猟採集という狩猟採集経済の細分化、そしてそのなかでイヌが人類最初の家畜となった過程を、ミトコンドリアDNA研究の成果をふまえて論ずる。

第2章は西アジアを舞台に、初期農耕と動物の家畜化がとりあげられる。「肥沃の三日月弧」地帯で展開した耐寒・耐乾性に長じたC₃植物（イネ科）主体の古環境復元からはじまり、ムギ類の栽培化に至るまで、さまざまな学説や研究成果を参照して叙述される。その到達点に農耕の開始があるわけだが、人類学の成果を引用しつつ、農耕の開始が人類に「時間」と「所有」の概念をもたらしたこと、そして「所有」の概念の確立が動物の家畜化の前提条件になったと評価する。では、「家畜」をどうとらえるか。家畜とは生殖がヒトの管理下におかれる動物という定義に立って、ヒトへの攻撃性の多少、ナワバリ意識や排除性の有無、繁殖性の高低など諸動物の生態的特質を整理しつつ、西アジアではじまったヤギ、ヒツジからウシ、ブタの家畜化を描写する。おなじ動物を利用するにしても、野生動物と家畜の境は「最大の利益が得られる時点で処理」（p. 89）するか否かにあり、そこを上手に保全・管理した当時の人類は優秀な「生態系エンジニア」であった。議論はさらに、家畜のミルク利用

から、ネコの「家畜化」の問題、家畜化の代償としての人獣共通感染症へと移り、これらを農畜融合文化がもたらした現象で、人間と動物が相互に結びつくがゆえの生物進化の必然と述べる。さらに言及は現代の家畜にまで至り、現代の工業的な畜産下にある家畜は遺伝的多様性が小さいがゆえに絶滅危惧種であると述べ、その持続性に警鐘を鳴らす。また、ミツバチの「家畜化」（著者は否定的である）にもふれられる。多様な動物がとりあげられ、あつかう時代は後期旧石器時代の紀元前10000年前後から新石器時代、ときに現代までと非常に幅広い。叙述としてやや広がりすぎる印象もあるが、その意図はヨーロッパを論ずる前提となる農業・畜産のトピックを一通り提示することにあつたと思量される。

第3章は、西アジアにはじまる農畜複合文化の西漸過程を遺跡出土資料からあとづけながら、ヨーロッパの新石器時代文化を論ずる。その特徴は土器と農耕の存在にあり、ヨーロッパ考古学においてもながらく、これを文化の伝播ないし受容なのか、あるいは民族移動の結果とみるべきかが議論されてきた。古くはゴードン・チャイルドが「光は東方から」という名言でもって近東地域からの人間の移動を唱えたのに対し、1960年代以降、欧米を席卷したニュー・アーケオロジー学派は旧来の狩猟採集民の自立的な開発の結果と唱えたのは学史上有名な論争だ。著者は遺伝学的検討、すなわちミトコンドリアDNAの解析からハプログループを特定する研究成果を紹介して、旧来の狩猟採集民に西アジア方面から移住した農耕民の融合、しかもそれが波状的な移住行動の結果として成立したとする。これは近年の研究成果にも目配りのきいた議論で、現代ヨーロッパ人の身体的特徴（高身長、目や髪の色）の生成や、狩猟採集民と農耕民の衝突の考古学的物証もあげて補強される。その文脈から話題は東ヨーロッパの草原地帯へと移り、遊牧社会の成立とウマの家畜化がとりあげられる。ここでも叙述の主要な武器となるのはDNA分析の成果である。ウマの起源や家畜化の過程を詳細に追跡したのち、新石器時代の遺跡にみられる防御的な集落や遺構の出現を手がかりに、農耕民と遊牧民の軋轢や草原文化（金属精錬・加工、ウマ利用など）の波及を論ずる。リトアニア人考古学者、マリヤ・ギンブタスによる著名な「クルガン仮説」にもふれ、DNA分析の結果からこれを肯定的に評価する。クルガン仮説とは、黒海周辺のクルガン文化の担い手が原インド・ヨーロッパ語の話者であり、数回にわたる軍事的侵入の結果、その文化がヨーロッパへ伝播したとする学説だ。ただ、この仮説の主眼は、母権制から家父長制、あ

るいは地母神信仰から雷神信仰といった社会・文化の変化を、クルガン文化の担い手の軍事的侵入として説明したことがある。この問題についてはその後、イギリスの考古学者、コリン・レンフルー卿によってアナトリア仮説(レンフルー 1993)が出されるなど議論は続いている。黒海方面からの人間の移動がDNAからあとづけられるとしても、文化や社会の変容から立論されたギンプタスの仮説がそれによって完全に証明されたとみるのは、いささか早計ではあろう。

第4章はローマ化以前のヨーロッパ、いわゆる「ケルト文化」の時代が主にあつかわれる。青銅器時代から鉄器時代(注1)の移行期が舞台である。著者は母系的な農耕民と父系的な遊牧民の混合によって形成された融合的な新文化をケルト文化とし、その担い手をケルト人と呼ぶ。そして、ガリア・ゲルマニアを包括してケルトと定義し、その社会や文化を概述する(注2)。ケルト文化とは遊牧民的な父権的秩序のもと、母系的な精神世界を兼ね備えた文化であり、自然と動物の一体性や融合性が追求された。神とは「生態系の保全の領導者」(p. 172)であり、神と動物と人間とが「相互移行性、水平的な関係」(p. 171)とみる社会的価値観を有していたというのである。シカやイノシシ、クマといった狩猟獣は同時に豊穡や多産、勇気のシンボルとして神格化もされた。各地にのこる神話や伝承にも言及しながら、このような自然崇拜を基調とする多神教的な世界観、価値観こそがヨーロッパ文明の基層であったとする。この融合文化が環境に与えた負荷について説明されたのち、ギリシャ・ローマの史料にみえる動物と人間の関係が紹介されて本章は閉じられる。

農業・畜産をとまなう文化を、著者はこれまで「農畜複合文化」としてきたが、第4章では「農畜融合文化」と呼称する。その理由は明確に述べられていないが、以上の議論から思量するならば、ヨーロッパ鉄器時代における宗教文化の特質も視野に入れたうえで、両者を単なる並立とみるのではなく、より有機的に絡み合った段階に至るとみる評価が背景にありそうだ。著者は本書の冒頭で「西欧キリスト教価値観」との対峙を重要なテーマと位置づけ、これがもたらした弊害にたびたび言及する。そこにおいて、ケルト文化にみる多神教的な自然観は「西欧キリスト教価値観」のアンチテーゼとして定置されている。

だが、著者の議論をこのように理解したとき、大きな疑問点が生ずる。ケルト文化の定義である。人文科学の成果に照らし合わせるならば、著者の定義はあまりに

も単純にすぎるといわざるを得ない。「ケルト」概念は、歴史学や考古学、言語学、文学などさまざまな分野であつかわれてきたが、そのさすところは一致しておらず、統一的概念として掲げることに疑義すら出されている(原 2004; 田中 2002)。たとえば言語学的観点からすれば、ケルトとはインド・ヨーロッパ語族ケルト語派に属する言語の地域であって、著者の定義(ガリアとゲルマニア)と一致しない。ゲルマニアはゲルマン語派(ゲルマン人)の地域で、すでに19世紀段階からケルト人とは異なる民族と認識されていた。ゲルマニアを含む定義には無理がある。現代、「ケルト」といえばおそらく、アイルランドの文化や美術が一般的にはイメージされるが、これは中世の文化事象に根ざしたものであるし、イギリスやアイルランドの古代文化もかつてケルト人がもたらしたと考えられてきたが、近年はブリテン鉄器時代文化の担い手をケルト人にもとめない学説が有力である(新納 1999)。ヨーロッパの基層文化たるケルト文化という主張は、現代の政治的産物にすぎないという意見すらある(原 2004; 田中 2002)。著者が本章で用意した枠組みは、ヨーロッパ鉄器時代をケルト人=ケルト文化=ケルト語と単純明快な構図で説明した19世紀の学説の域を出るものではない。文化の伝播と民族の問題は、近代以降のヨーロッパ考古学でも長い論争をもつ、非常に複雑で難しい問題だ(エガース 1981)。その複雑な現状に対し、著者の議論は時代幅や地域性を大きく捨象し、古代ヨーロッパ≡「ケルト文化」ととらえたがために、あまりにも皮相的、図式的なものになっているのだ。

もっとも、著者の意図はケルト文化の精密な議論にあるわけではなく、一般的なイメージで語られるケルト文化の宗教性、とくにその自然観を西欧的キリスト教価値観との対峙でとらえ、一定の評価を下すところにあったはずである。上述の指摘はその意味では、歴史学側の瑣末な批判である。それはおくとして、かりに著者の論旨に沿ってみれば、「ケルト文化」が伏流的な立場に追いやられる契機としての、紀元前1世紀以降のヨーロッパのローマ化は重要な意味を持つはずだ。ガリアやゲルマニアがローマ帝国の属州となり、さまざまなギリシャ・ローマの文物が伝播して在地の文化と同化した。キリスト教もまたそのひとつの波として押し寄せ、定着していったものだからである。だとすれば、ギリシャ・ローマの自然や動物観こそが十分に吟味される必要があると思われるが、この点は古典文学の記述を紹介する程度にとどまっており、淡白な印象を受ける。

第5章では古代的世界観と矛盾対立するものとしての

キリスト教的世界観が提示され、温暖期を迎えた中世の自然改変を中心に、農業・畜産の変化や森林の開拓がとりあげられる。遺跡出土の動植物遺存体の分析成果をふまえ、ヨーロッパのムギの低生産性を指摘し、豆類やキビなどの雑穀類の栽培も盛んであったこと、また、動物性タンパクの摂取は家畜に依存しており、野生動物の利用が少なかった食物相を描写する。その克服のために、中世ヨーロッパでは森林を切り開いて開墾が進展した。森林は消失し、冒頭で述べたヨーロッパの田園風景の原型が創出された。野生動物の絶滅が森林消失によって引き起こされた旧説を批判し、森林の消失に対する動物側の応答はさまざまであったことを指摘する。DNAの分析結果も加味して、動物の分布域の拡大や減少は種ごとに異なっており、「人間との間に新たな関係や葛藤」(p. 212)を生じたと評価する。このような個々の動物の研究成果を丹念にふまえたきめ細かい議論は著者の真骨頂である。

つづいて野生動物と森林の管理に議論は移る。まず森林利用について当時の史料をふまえながら、鷹狩りによる狩猟の場とみる王や貴族(領主)層と、薪炭や林産物、放牧、養蜂の利用を主とした農民層という構図を描き、森林利用をめぐるつねに対立的であった両者の関係を明らかにする。この構図は結果的に動物や自然の保護につながったが、一方で領主層の強権的管理への反発から醸成された農民たちの森林や野生動物への敵対意識が、のちの乱伐や乱獲の遠因になったと述べる。

本章の主眼はキリスト教的自然観の説明にある。キリスト教の受容史から説き起こしながら、著者はキリスト教を遊牧民の宗教と定置し、神-人間-自然が階層的、相互排他的に位置づける価値観が根本にあるという。序列や峻別が明確であり、それゆえに排除や差別を容認する価値観。これが人間と動物のその後の関わりに決定的な影響を及ぼしたと論ずるのである。著者は中世の動物裁判も引き合いに出しながら、神の威信、人間による動物支配の肯定、ひいては神-人間-自然の序列的な価値観の再確認が社会の幅広い範囲で強制されたとする。かくして、動物と人間の親和性が高かった古代ヨーロッパの世界観は過去のものとなった。中世に盛行した動物裁判や魔女裁判を、著者は既存の価値観を徹底的に破壊し、神や聖書の権威を示し、キリスト教的価値観に置き換える思想改造の場であったと断ずる。

このような著者の議論の背景に、1960年代に論争を巻き起こした、リン・ホワイトの問題提起をみてとることは難しくないであろう。ホワイトは創世記の記述を引

用して、神と被造物の関係、そして神の似姿としてつくられた人間が被造物たる自然を支配する正当性をもつという聖書の観念が、自然からの搾取を正当化する論理の後ろ盾になったと主張した。現代の生態学的危機に対する最大の責任は、それゆえにキリスト教にあるのだと(White 1967)。環境倫理学における著名な論争史の一齣である。オーストラリアの哲学者、ジョン・パスモアはこれに対し、創世記は搾取の容認や正当化を保証しているのではなく、神の代理人として自然を管理をせよと説くのだと述べ、むしろ人間中心主義的な環境保全思想の源泉であると反論した(Passmore 1974)。ホワイト自身が評価したアッシジの聖フランシスコの事績は、動物と人間の関係が必ずしも支配的ではなかったことを示す事例と解釈されているし(注3)、イギリスの神学者、アリストター・マクグラスは地球保護や豊穡への責任論、そこにおいて明確な境界線がひかれた人間の役割といった、現代の神学的生態観に関する議論を示してホワイトを批判する(マクグラス 2002)。著者が依拠するキリスト教的自然観は、いまなお賛否両論のさなかにあるのである。著者が思想改造と説く動物裁判にしても、これがキリスト教の教義に淵源した人間中心主義の反映、すなわち神の法や正義に保証された人間の自然支配の正当化のもとに人間の正義を動物へ敷衍し、同化をはかる試みであることはたしかだとしても(池上 1990)、法理に反すれば人も動物も等しく裁かれたことを直視するならば、必ずしも人間の動物支配にのみ帰結できない。人間の優越性を無反省に是認する自然観の弊害への批判は妥当であるとしても、その歴史的な説明として、すべてキリスト教的価値観に還元させる著者の立場は、いささかの違和感を抱かざるを得ない。西洋史学者の池上俊一は、中世西欧をかたちづくるキリスト教的価値観には、人間中心主義的で動物と人間の隔絶を強調する側面と、それとは逆転的な動物のイメージ、すなわち友好的な動物、聖なる動物という価値観も共存していたと述べる(池上 2020)。動物と人間の関係は必ずしも一筋縄ではいかない。このような矛盾をはらむ両義性こそを直視するべきではないだろうか(注4)。

第6章は北欧を舞台に、毛皮利用の問題とそれがもたらす広域経済を論ずる。スカンディナヴィア半島のサーミ人の起源からはじまり、トナカイ猟、ヴァイキングの活動、セイウチ猟にともなうアイスランド・グリーンランドへの植民など、毛皮を焦点とした人間の動きが描写される。さらに、衣料としての羊毛と毛皮の利用に話題は移り、ハンザ同盟による毛皮交易がとりあげられる。

「近世への胎動」と題しながら、あつかう時代は先史時代から16世紀まで、地域も北欧のみならず中東やノヴゴロドと幅広い。衣料としての動物利用を論ずるにあたり衣類そのものの歴史から説き起こす点はきわめて周到ではあるが、章題に関するかぎり、かなり議論が拡散している印象も否めない。

第7章では、羊毛に加えてスパイスやクジラもとりあげ、植物から海産資源まで「世界商品」となった生物資源の国際的な争奪を描く。農畜融合文化と遊牧文化の双方を支えた動物としてヒツジを位置づけたうえで、羊毛専用種として著名なメリノ種の来歴を分析したのち、スペインの牧羊業や、フランドルを中心とした毛織物の交易拠点でメリノ種が覇権を握る過程が述べられる。つぎにスパイスがとりあげられ、大航海時代のスペイン・ポルトガルを中心とした資源争奪の様相、そして16世紀以降のヨーロッパの人口増で需要が増した海産魚類として、ニシンやクジラ、タラ漁業にみる乱獲へと話題は移る。タラ漁（タラもニシンも、ハンザ同盟商人の取引品であった）の盛行はタラの激減だけにとどまらず、エサや食料の確保、漁の合間の海鳥狩猟によって周辺地域の多くの海鳥の乱獲や絶滅につながったと説く。著者は大規模におこなわれたタラ漁の進展を「人間と野生動物との関係を根本から変えてしまう転換点^{ターニングポイント}」(p. 370) と評し、海産資源の乱獲が生態系の多方面におよぼした影響を明らかにする。

このような乱獲の背景に、著者はキリスト教価値観の人間中心主義的側面をみる。いわく、自然と生物が、おそらくそれらが神の被造物と解されていたがゆえに、その有限性に対する認識が欠如していたこと、そして無主物（生物資源）の所有は、努力によって獲得したものとして道義的に肯定されたという。さらにデカルトの『方法序説』を引用し、物体と精神の二元論的な観念や機械論的自然観が、動物や生物資源の乱用に痛痒を感じさせぬ風潮に拍車をかけたとする。当時の人びとの行動背景にデカルトの思想をただちにあてはめる姿勢にはやや疑問を感じるが、ともあれ、キリスト教が肯定する「自然の支配」や「自然に対する人間の勝利」(p. 375) といった観念が、動物に神をみて、その融和的な共生を是とする古代的な価値観を淘汰し、野放図な乱獲への道筋をつけたという文脈で16世紀前後の生物資源の世界的争奪を位置づけるのである。

第8章の焦点となるのは、ヨーロッパ諸国の世界的な生物資源争奪戦の果てにあらわれたアメリカ新大陸への植民、そして毛皮を求めたロシアのシベリア開拓である。

生物資源をもとめる飽くなき探求はここに至り、地球のあらゆる場所におよんだ。肉や荷役、被毛だけでなく、ジャガイモ栽培の肥料としての糞の期待からリヤマやアルパカを家畜化したアンデス文明や、トウモロコシ栽培を主体とし、家畜を持たなかったマヤ文明といった先住民文化は、ともに野生動物との持続的な関係に立脚していたが、その脆弱なバランスはヨーロッパ人の入植によって破壊された。北米大陸ではとくにビーヴァーが注目され、17世紀以降の毛皮人気を背景とした活発な交易の結果、毛皮資源をめぐる先住民部族間の争奪がおり、やがてはヨーロッパ強国の進出へと至ったという。ヨーロッパ入植者が持ち込んだ病原菌（コレラ、ペスト、天然痘など）は先住民の人口減少をもたらした。同時にさまざまな外来種の導入は現地の生態系に不可逆的な影響をもたらした。生態系という観点に立つアメリカ大陸の植民史叙述は明快だ。

16世紀後半以降、ヨーロッパ社会で高級品として毛皮需要が高まるなか、ロシアは資源を求めてシベリア開拓へのりだした。クロテン（セープル）やクロギツネ、キタリスを求めてはじまった開拓は、やがて18世紀末にはベーリング海を舞台としたラッコやオットセイの毛皮資源の国際的な争奪戦へと逢着した。現代の研究成果にもとづき、乱獲による減少が引き起こす遺伝的多様性の喪失や、生態系バランスの破壊を明確に論ずる。生物群集ネットワークの中心となる動物の研究が、生態系全般の理解に役立ち、漁業や環境をめぐる問題解決のきっかけとなるという著者の主張は歴史から導き出した教訓として、すぐれて現代的な価値をもつ。

第9章はイギリスを中心としたヨーロッパで、博物学の勃興とともに動物への興味関心があらわれ、動物愛護の精神が萌芽する過程が論じられる。その叙述は行きつ戻りつ、かなり錯綜しているが、おおむね18～19世紀が対象である。植民地化の過程でイギリスに世界各地の自然や動植物の知識・情報が集まるなか、博物学ブームの担い手となったのが中上流階級、有産階級であった。このような風潮は18世紀イギリスの知的世界で台頭した理神論や自然神学的科学の傾向とあいまって、神の被造物たる生物の克明なリストの完成を使命とする枚挙主義、実証主義的な博物学へと成長した。この時代はまた、輪裁式農法からはじまる農業の集約化とともに家畜の品種改良がすすみ、またイヌやネコ、小鳥が上流階級のペットとして飼育され、観賞のために熱心な品種改良がおこなわれた。一方で、女性の服飾、クリノリンや帽子の材料としてクジラや大型鳥類の羽根が珍重され各地で乱獲

がすすんだ（日本においても、トキやアホウドリが乱獲され、その羽毛が輸出されたことが記される）。このように正負はあれども、著者はこの時代を総じて動物と人間との距離がきわめて短くなった時代と総括する。つづいて視点は大陸に移り、薬草利用や園芸のために活躍するプラント・ハンターや、上流階級で流行したさまざまな標本・文物のコレクションブームが紹介される。このような活動の背景に、著者はリンネの『自然の体系』で確立した二名法をあげる。属と種の併記で生物を記述する方法によって、「言語のちがいを乗り越えて、人類は初めて生物の世界を共有」(p. 472) できたというのである。叙述はふたたびイギリスにもどり、アカデミズムの世界で図譜、事典、カタログが続々と刊行された19世紀初頭を、博物学や自然誌が自立的学問へと成長し始めた段階と評価する。

最後の論点は、自然保護運動の萌芽である。19世紀イギリスでは工業化の過程で環境汚染が進み、都市労働者は劣悪な環境下にあった。当時の下層庶民層を中心に流行したのが、ネズミ掛けといったブラッド・スポーツ（動物いじめ）であった。これが動物虐待と毫もみなされなかったのは、動物を同一平面向き合う発想を欠く当時の自然観があればこそであったが、一方で上中流階級や知識階級では、徐々に動物愛護の精神が育まれた。家畜の不当な扱いや虐待を防止する運動は、1835年には動物いじめ規制を含む動物虐待防止法（1835年）や、生体実験の禁止を盛り込んだ動物保護法（1911年）へと結実した。著者はこのような、きわめて急進的な制度設計がイギリスで達成された要因をヴィクトリア朝時代の上中流階級の思想に求める。すなわち、宗教的価値観から逸脱した「野蛮な」下層民を教化する意図をもった、上中流階級の博愛・人道主義的価値観が敷衍された結果だというのである。著者の説明はアニマル・ライト論（功利主義哲学）や、人間も動物とするダーウィンの生態観の影響を重視する従来の見解に比べれば、宗教や徳徳といった側面に傾斜しているくらいはあるが、都市労働者の環境改善や教化など社会改良の文脈で都市公園やナショナル・トラスト運動が勃興したとする議論（四元 2003）を参照してもおおむね首肯できよう。

第10章は、17世紀以降の北米大陸への入植過程で、いかなる野生動物が乱獲・絶滅し、それに対してどのような自然保護制度がつくられたかが焦点である。トウモロコシ主体の粗放的な農業を営み、火入れによって人為的な攪乱をつくりながら営んできた先住民の農法は草食獣に十分なエサを供給し、シカやバイソンの狩猟も危機的

な捕獲圧にならなかった点で、「生態系の管理」につながったと評価する。これに対して、入植者は毛皮の乱獲に邁進した。グレートプレーンズに住むプレーリードッグの事例は非常に教訓的だ。草原の土壌耕転や養分供給に寄与した「生態系エンジニア」であったかれらの激滅は、草原地帯を荒廃させ、ひいてはかれらを捕食し、利用した動物の絶滅につながった。一種類の動物の激滅が、生態系バランス全体を大きく崩したのである。著者はこのような激滅・絶滅した動物の検証こそが重要と主張する。絶滅や乱獲の「背景や要因を環境や社会のなかに探り、歴史・社会的な文脈のなかに位置づけること」、これが「自然や野生動物に対する人間の多様な営為をとらえなおし、ここから新たな行動原理を抽出」(p. 542) することにつながるからだ。本書を貫く、動物と人間のありようを歴史的に考える意義が端的に示されたこの主張は傾聴に値する。乱獲の話題は海洋資源にもおよび、18世紀以降のアメリカ捕鯨の隆盛にふれ、「常軌を逸した乱獲」(p. 558)と断罪する。

以上のような破滅的規模の自然破壊によって、アメリカではさまざまな環境問題が生じた。開拓による草原の破壊、裸地化によって引き起こされた広範囲の砂嵐被害や、虫害、森林の枯死である。その反省として自然保護意識が覚醒し、さまざまな制度が整備された。動植物の調査や駆除動物の導入にはじまった政府の対策は、19世紀末から20世紀にかけて国立公園の設置や、野生動物の移動を禁止・制限するレーシー法の制定へと至った。著者は国立公園制度の創設に、森林や野生動物を含む公共財は行政府に信託され、保護されるべきとする「公共信託論」の考え方を見出し、制度確立の過程で保全 conservation に重きをおくものと、保存 preservation に重きをおく二つの潮流があらわれたと論じ、提唱者の名前にちなんで前者をピンシャー主義、後者をミューア主義と名づけた。前者がワイズユースを通じた管理や利用のための保護を主張し、科学的基盤に立脚して浪費の抑制や永続的利用を説くのに対し、後者はキリスト教的汎神論を背景に、「神の原初の大神院」たる自然に一切手をつけない保護を主張する。この二潮流はやがて、20世紀初頭のヘッチ・ヘッチーダム論争を経て前者へと逢着した。その延長線上に著者は、アルド・レオポルドの「土地の倫理」論を位置づける。共同体概念を人間社会のみならず生態系にまで拡大し、共同体全体の利益を考えた土地利用を是とするレオポルドの倫理に対し、著者は生物多様性の価値論に道を開いた点を評価しつつも批判する。人間と自然はシステムとしてとらえるべきもので倫理上

の問題ではないこと、生物群集の安定を静態にとらえずにすぎていること、そして倫理の基盤としての自然観がミューア主義の焼き直しであるとする点だ。著者の筆はさらに20世紀後半に至り、海洋資源（オットセイやラッコの捕獲に関する国際ルールづくり）や鳥類保護（渡り鳥の保護）の事例や、農薬による環境破壊を告発したレイチェル・カーソンの『沈黙の春』を引き合いに出しながら、ピンショア主義の帰結点としての1973年の絶滅危機法を論ずる。かくして成立した現代アメリカの野生動物保全を、公益信託論に立脚した科学優位主義としながらも、それは土地所有の歴史的しがらみが浅い開拓国家ゆえに成し得たもので、グローバル・スタンダードにはなり得ないと断ずる。「差別された、優等生すぎた、とりすぎました、よそいきの、人間不在のご都合主義」(p. 595) という評価は辛辣だ。動物と人間、自然の間には複雑な関係が取り結ばれてきたがゆえに、被害者-加害者の関係性すらも複雑で流動的であり、それゆえにそれぞれの国の歴史や文化に根ざしたものでなければならないと考えるからである。

第11章は、植民地アフリカで展開した自然保護制度と、ナチス・ドイツが推進した動物愛護制度をとりあげる。アフリカでも例にもれず植民地化の過程で動物が乱獲された。悪名高き象牙の輸出のほか、著者はヨーロッパ人の狩猟ブームをみる。乱獲の果てに20世紀以降、野生動物保護の動きが高まり、種指定主義にもとづく制度化が達成された。著者はこれを、狩猟のコントロールが目的で野生動物相や生態系の保全を考慮していなかったと述べ、セレンゲティ国立公園の事例をあげて先住民を排除した保全に疑問を提起する。現代にも連なる観光サファリやエコツーリズムの流れは、真に野生動物と地域住民の生活を守ってはいない。「地域社会を野生動物管理の主人公」(p. 628) にする必要性を強調するのである。野生動物の利用は地域住民に委ねられるべきであり、自発的な決定や運営ができない制度は欠陥である。地域住民のボトムアップを前提に、政府のトップダウンをもとにもう環境ガバナンスこそが、人間と動物の双方を守る方向性だと述べる。

時代はふたたび1930年代にさかのぼり、ナチス・ドイツの動物愛護がとりあげられる。1933年の動物保護法や翌年の帝国狩猟法、帝国森林荒廃防止法などの一連の政策の先進性を指摘しつつ、その背景にドイツ民族の独自性を保持する「郷土保護」運動の影響をみる。森林と原野こそがドイツ民族の原風景であり、民族的アイデンティティの保持のために固有の自然美が保護されなければ

ならなかったのである。当時のワンダーフォーゲル運動、有機農法の流行にもふれながら、著者の吟味はエコロジー運動と民族主義の結びつき、そしてそれらに「エコロジー」の創始者、ヘッケルのエコロジー概念へたどりつく。おなじ物理的法則に支配される点で生物と無生物に根本的な境界はなく、その差は進化の段階差にすぎないとするヘッケルの一元的自然観を、ナチス・ドイツの政策を用意することにつながる全体論的生物学ととらえ、当時のアリヤハチの研究から真社会性動物への関心が高まった動向にもふれながら批判的に論ずる。

20世紀の動向を考えるために、アフリカやドイツが目すべき事例であることはおそらくまちがいない。しかしながら、この二つを取り合わせて一章とし、「異相」(章題)と総括する著者の意図は必ずしも明快とはいえない。両者の対照的なあり方をどう評価するのか、その何が「異相」たるのか、もう少し掘り下げがあってもよいように思われる。また、「全体論的生物学」を批判しながら、一方でその帰結たるナチス・ドイツの制度の先進性を肯定的に評価するにもかかわらず、先進性の根拠となるはずの戦後ドイツの諸政策との関係が明確に示されないために、ドイツの制度をめぐる議論は歯切れの悪さものこる。

第12章でとりあげられるのは、日本の生物資源管理(クジラ・マグロ)と、アメリカの環境倫理学の勃興である。西欧を舞台と標榜する本書で、突如として日本がとりあげられるのはいささか奇異にみえるが、その主題となる捕鯨が西歐的価値観を受容した近代日本によって、ヨーロッパ諸国に伍して繰りひろげられた経緯を意識したためであろうか。江戸時代からはじまり、近代的捕鯨法の導入を経て有数の捕鯨大国へと成長していく姿、そして戦後の国際的な捕鯨規制における日本の対応が叙述される。著者は捕鯨の全面禁止論に立つのではなく、資源管理が徹底的かつ適切におこなわれる範囲においてはむしろ推進されるべきだと説く。現代の捕鯨禁止論が資源管理の問題を逸脱して文化やモラルの問題をからめた政治的議論に陥りつつある弊を指摘しながらも、日本の捕鯨が十分な科学的根拠に依拠せず、結果的に資源崩壊に関与してきたことを批判する点は、非常に均衡のとれた議論である。著者は、「人間との関係や相互作用においてもっとも適切な状態に誘導・維持すること」(p. 689)こそが管理=保全であり、その点において利用と保全とは対立概念ではないと述べる。ところが捕鯨に関する現代日本の主張は、保全と利用を対立的にとらえる点に問題があり、双方を両立させるモデルとしてあらたな調査捕

鯨政策を構築すべきと提言する。

議論はアメリカの環境倫理学に移る。1960年代以降の環境問題対策のなかで勃興した環境倫理に対する知的潮流を概観したもので、ピーター・シンガーの動物解放論や、ディープ・エコロジー、社会エコロジーという環境思想の主要な論点について論評が加えられる。環境倫理学史にのっとった叙述である。百家争鳴ともいえるアメリカ環境倫理学の議論はしかし、多様な地域社会や固有の生態系に十分に目を向けず、グローバルな危機意識の提唱に凝縮してしまっていること、またその主張がアメリカ生態学の成果と連結していないと述べ、当時の環境や社会と適切に切り結び得ていない点において、その主張にはいびつさがあると喝破する。議論はついで再生可能資源の持続性から環境経済学の動向におよぶが、これは終章につながる論点である。

資源管理と環境倫理学の重要性は首肯できるにしても、章題にある両者の「架橋」が奈辺にあるかは明確ではない。終章を参照しても著者が環境経済学の構想に期待を寄せていることは明白であるが、本章の叙述は、間に環境倫理をはさんだがゆえに、論旨がやや不明瞭になったように思われる。

終章は生物多様性とは何かを論じたうえで、その保全について考察が加えられる。生物の五界から3ドメイン説、生物の進化や古細菌、微生物による物質循環と多岐にわたる事例を引用しながら、生物多様性を著者はこう説明する。いわく、「生命の歴史性と連続性、階層性と相互の関係性と依存性、環境との一体性と循環性、そしてそれらの全体性」(pp. 745-746)であると、種としての多様さはもちろんのこと、それぞれがたがいに切り結ぶ関係のかくも多様なあり方こそが、生物多様性の本質なのだ。では、それを私たちはどのように保全すべきなのか、この結論的な問いに対し、まず制度のあり方から考察する。1970年代のワシントン条約や世界遺産条約、ラムサール条約、ボン条約から1990年代の生物多様性条約へと至る国際条約を論評し、生物多様性が地球環境問題として認知され、それをあらたな価値基準として持続可能性や生物資源から生まれる利益の配分や管理、公平性に注目されるようになった点を到達点と位置づけながらも、なおその実効性が十分に担保されていない現状を憂慮する。生物多様性の高さが生態系サービス機能、すなわち自然の恵みの豊さにつながる以上、生態系変化が人間生活におよぼす影響を評価する枠組みの早急な整備を提言する。

ついで著者は経済学に目を向ける。持続可能性の方策

としての環境経済学の提言だ。ケインズ以来の近代経済学の潮流を回顧したうえで、これらが自然や環境への配慮を欠くと指摘し、対して古典派経済学やマルクス経済学にみられる自然や環境へのまなざしを再評価する。最後に現代アメリカの経済学者、ハーマン・デイリーの議論に言及する。「持続可能な社会とは、生物多様性の歴史性や連続性を確保し、生物間の相互作用や循環を保全し、環境との一体性を保証する経済の仕組みをつくることにほかならない」(p. 782)と述べて、デイリーの主張する環境経済学(定常経済論)の方向性に期待を寄せるのである。

動物と人間の関係から野生動物保全管理へ

以上、本書の内容を概観した。140万字を越える大著をかざられた紙幅で紹介するのは無理があり、触れられなかった論点が多々あることを諒とされたい。

著者の広大な試みからあぶり出されたものは何か。キーワードをいくつか列挙するとしたら、地域性や固有性や複雑系、システム性となろうか。月並みな整理であるが、それぞれの場所に固有の自然環境が展開し、動物たちはそれに適応した進化を遂げてきた。動物と人間の間だけではなく、動物相互においても捕食-被食や利用-被利用といった関係が複雑に存在し、それは人間の活動を触媒として時に流動化することもあった。人間と自然は単純な対峙の関係にあるのではなく、人間も含めた諸々の動物が、固有の自然環境のなかでさまざまな関係性をもって織りなす生態系のネットワーク・システムのなかに生きている。これはガラス細工のような精巧さや脆弱さもあわせ持つ。

著者は本書の最後で、保全管理の問題についても提言を試みている。著者は必ずしも、生物資源の枯渇に対して一律の禁止を主張しない。個々の動物の保全管理とは、生態系を見据えたホーリスティックな対応でなければならないのだと、適切さが担保されるのであれば、資源の利用は十分に許容される。それゆえに著者は、地域性や固有性、複雑性を背景に追いやり、一元的なグローバルスタンダードのごとき観点や方法の適用を厳しく批判する。アメリカの野生動物保全(第10章)や、キリスト教的自然観(第4・5章)、機械論的自然観(第7章)への批判などは、すべてこうした地平からあらわれたものである。複雑さを複雑さとしてとらえ、安易な画一化、単純化を良しとしない姿勢だ。著者のこの姿勢は、動物と人間の関係史の探求から保全管理に関する論評や提言に至

るまで一貫している。

「動物と人間の関係史」を叙述するために：動物の「地域」、人間の「地域」

歴史にはつねに、語りの問題がつきまとう。何を、どこから、どのように語るのか。その舞台として、著者は冒頭で「西欧」を選択すると宣言した。しかしながら、結果としてとりあげられた地域は、地理的概念としての西欧にとどまっただけではない。とりあげた地域は最終的に、中東、中東欧、南北アメリカ大陸からアフリカ、ひいては日本にまでおよんだ。その意図は明言されていないが、かりに推し量るならつぎのようにならうか。すなわち、西欧に成立した文明の源流（農業・畜産の発祥地たる中東や、遊牧民を介してそれを広めた中東欧）、そして西欧文明の世界制覇の過程で進出した地域（南北アメリカ、アフリカ）、そして西欧的価値観を受け入れた近代日本というように、西欧文明が成立し、展開してゆく過程で関わった地域を含めて「西欧」とする考えである。この憶測が的外れでないとするならば、これはむしろ「西洋」というほうが妥当ではあるまいか。

そのように考えると、読者は「東洋」が本書ではとりあげられていないことに容易に気づくであろう。アジアはほとんど俎上にあげられていないのだ。著者は西欧文明の自然観をキリスト教——神教的と喝破したが（第5章）、その延長でいえば多神教的自然観が存在するはずであり、粗雑な図式化が許されるならば、それは「東洋」にあたるといっても過言ではないだろう。とするならば、著者のいう「動物と人間の関係」は、その意味でなお半面を描き得たにすぎないということになりはしないだろうか。

もちろん、これを本書の限界と批判するのは適切ではあるまい。現代の環境倫理学や動物保全管理思想が西洋思想の系譜のなかで生まれ、発展してきたことを想起するならば、「西洋」をとりあげ、活写した意義はきわめて大きい。著者の議論を受けて、「東洋」を同様に掘り下げていくのはむしろ、後学に課せられた重要な宿題だ。

ところで、このような西欧／西洋は、人間が創出した、あるいは人間の足跡をもとに措定された地域概念である。当然のことながら、動物の「論理」はそこに一切反映されていない。ひとしく生態系をかたちづくる一員としてあつかい、そして動物からの視点が成り立つような動物と人間の関係史、これこそが著者がかけた目標であるが、それに照らし合わせるならば、さしあたり動

物の「地域」とは、その自然環境に進化適応する過程で形成された原住地とならうか。しかしながら、その動物の「地域」と、西欧に象徴されるような人間の「地域」には根本的なズレがあることは明白である。

時空間によって定置され、さまざまに関係づけられた事象の群体をいかに叙述するか。東洋的な概念を持ち出すならば、編年体と紀伝体という二つの方法がある。前者はクロニクル、すなわち時間軸で整序する方法であり、後者はテーマごと（本来は国家や人物）にまとめる方法だ。その点でいえば先にも指摘したように、本書の歴史叙述は時に錯綜し、このような一般的な歴史叙述形式の枠組みにおさまりきれていない。おそらく、関係そのもの以上に関係の動態を見極めようとしているからであろう。

動物と人間の関係に関するさまざまな事実を正確に把握し、記述することが動物と人間の関係史の重要な課題であることは論を俟たない。しかしながら、それがすべてでないこともまたたしかである。背後にある複雑な生態系の存在を視野にいれるならば、むしろ両者の間主観性、主体や客体、被害者と加害者といったさまざまな関係がさまざまなファクターによってめまぐるしく変わり得ること、そして動物と人間の関係の変化が、動物間のそれをも引きおこし、全体として生態系を歪め、崩壊させるという、複雑きわまりないダイナミズムをいかにすくいあげるかにある。それゆえに、著者のめざす動物と人間の関係史は、それ自体を相対化せしめる視座を備えた、あらたな歴史叙述を創出する必要性をも必然的に提起する。この解決もまた、後学に課せられた重要な課題であろう。

おわりに

以上、長々と贅言を連ねたが、評者の浅薄な理解や誤読にもとづいた的外れの論評も多々あるものと思われる。著者および読者に対し深くご寛恕を乞う次第である。著者の歴史理解にいくつか批判も加えたが、本書の広大な構想をまえにすればそれは瑣末にすぎず、本書の価値はいささかも揺るぐものではない。動物と人間の関係史の深化において、本書が重要な里程碑となることは疑いない。

歴史学はいまや動物との関わりにまで、その語るべき対象を広げはじめているが、本書は人間を主語とする歴史学の伝統的な立脚点が必ずしも自明ではないことを教えてくれる。ガラス細工のように精巧で同時にもろい

生態系のなかで、さまざまな動物に伍して生きる人間という、生態学的には至極あたりまえの認識を、歴史学の側でどのように受け止めて歴史叙述へと昇華できるのだろうか。人間の足跡を明らかにし、歴史的事実を積み重ねるといふ基本的な身振りにおそらく変わりはあるまい。しかし、その一方で、このような根源的な課題がつねに横たわっていることを、私たちは肝に銘記する必要があるだろう。「関係」relationとは、ラテン語のre（再び、逆方向へ）+latus（運ぶ、持ってくる）を語源とする。再び持ち戻ること。生物学と歴史学の絶えざる往還と対話こそが、著者が提起した問題群を深めてゆく枢要の、そしておそらくは唯一の方法であるのだから。

注

- (1) 著者は前史として鉄器時代の成立に触れるなかで、鉄精錬技術の起源に関する学説を紹介し、アフリカ説が有力だと評価する (p. 165)。サブサハラ地域で発見された製鉄関連遺構は考古学でもさまざまな評価されているが、起源に関しては年代的にみてもアナトリア地域とみるのが優勢で、著者が指摘するようにアフリカの事例が有力な反証たり得るかは議論の余地がある。
- (2) 本書の論旨を損なうものではないが、本章では歴史的にやや正確さ、厳密さを欠く記述が散見される。著者は紀元前800年ごろに中欧で成立したヨーロッパ最初の鉄器文化、ハルシュタット文化と製鉄技術の伝播を説明したうえで、「この後“ラ・テーヌ文化”が、そしてケルト文化がこれを継承し、鉄を採用した農畜融合文化が開花していった」(p. 166)と述べ、三者を階梯的にとらえるが、これまでの旧来的なケルト観でいえば、両方の文化の担い手がケルト人であったから、この記述では著者のいう「ケルト文化」が何をさすのかがわからない。また、著者のいう「ケルト文化」の集落の説明において、「個別の共同体や部族が占有する領域」を「キヴィタス」^(ママ)とし、「このなかに、農民は“オピドゥム”と名付けられた地域的な村落共同体を形成」(p. 167)したとして、入れ子のようなイメージで両者を説明する。しかしながら、キヴィタスはむしろ社会組織を示す概念であって、複数のオピドゥムを内包する領域、一種の行政区としてとらえられるようになるのはローマ帝国の東西分裂以降であり、「ケルト文化」の時代の説明としては正確ではない。
- (3) 実際にこの考え方をうけて、ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世は1979年、アッシジの聖フランシスコを「自

然環境保護の守護聖人」と定めた。

- (4) 著者が動物裁判の事例として指摘するブタも、両義的なイメージに包まれた動物の一例であろう。罪を犯して吊し上げられたブタは一方で、聖アントニウス（現在でも、ペットの守護聖人となっている）と結びついており、ブタを連れ歩く聖アントニウスは絵画のモチーフにしばしばとりあげられている。また池上によれば、14世紀のフランスでは聖アントニウスを奉ずる修道会にブタを連れてパリを自由に通行する特権が王より与えられており、ブタを連れた修道士の訪問は幸運の象徴として市民に歓迎されていたという（池上2020）。

摘要

本稿は三浦慎悟氏『動物と人間 関係史の生物学』の書評である。西欧を舞台に動物からの視点による動物－人間の関係史を標榜する本書は、現生人類の誕生から現代に至るまで、中東地域からヨーロッパ、アメリカ大陸やアフリカ大陸、そして近代日本に至る広範な地域を涉猟し、生態学的知見にもとづきながら両者の関係を素描して現代の生態系保全管理に提言を試みる。その背景には、各地の自然環境に適応するなかで動物と人間が複雑に絡み合って織りなした、精巧で脆弱な生態系への直截なまなざしがある。それゆえ、著者は画一的な価値観の安易な敷衍を厳しく批判する。本書は動物と人間の「地域」の根本的なズレ、複雑な生態系観に裏打ちされた両者の間主観性やその転変のダイナミズムを明らかにした。従来の枠組みにおさまりきれないこれらをどのように歴史として叙述するか。本書は生物学と歴史学の対話や往還とともに、あらたな課題を投げかける。

キーワード 関係史、生態系、西欧、動物と人間、歴史叙述

引用文献

- エガース HJ (著)・田中 琢・佐原 真 (訳) (1981) 考古学研究入門. 岩波書店, 東京, 368 p.
- 原 聖 (2004) ケルト概念再考問題. 人文知の新たな総合に向けて 第二回報告書 歴史篇, 京都大学大学院文学研究科, pp. 291–306.
- 春田直紀 (2018) 日本中世生業史論. 岩波書店, 東京, 304 p.
- 飯沼賢司 (2004) 環境歴史学とは何か. 山川出版社, 東京, 102 p.
- 池上俊一 (1990) 動物裁判. 講談社, 東京, 236 p.
- 池上俊一 (2020) ヨーロッパ中世の想像界. 名古屋大学出版会, 名古屋, 948 p.
- マクグラス AE (著)・神代真砂実 (訳) (2002) キリスト教神学入門. 教文館, 東京, 851 p.

- 松井 章 (2008) 動物考古学. 京都大学学術出版会, 京都, 312 p.
- 水野章二 (編) (2011) 琵琶湖と人の環境史. 岩田書院, 東京, 272 p.
- 新納 泉 (1999) 岡山大学文学部研究叢書17 鉄器時代のブリテン. 岡山大学文学部, 岡山, 125 p.
- Passmore J (1974) *Man's responsibility for nature, ecological problems and western traditions*. Scribner, New York, 213 p.
- レンフルー C (著)・橋本楨矩 (訳) (1993) ことばの考古学. 青土社, 東京, 473 p.
- 田中美穂 (2002) 「島のケルト」再考. 史学雑誌, 111-10:1646-1648.
- White L (1967) *The historical roots of our ecological crisis*. *Science*, 155:1203-1207.
- 矢田俊文 (2009) 中世の巨大地震. 吉川弘文館, 東京, 203 p.
- 矢田俊文 (2018) 近世の巨大地震. 吉川弘文館, 東京, 248 p.
- 四元忠博 (2003) ナショナル・トラストの軌跡-1895~1945年 - 緑風出版, 東京, 294 p.